

外国出張報告



疫学研究チーム研究員 小林 創太

目的・用務：国際獣疫学経済学会

出張期間：平成 18 年 8 月 5 日～8 月 12 日

出張場所：オーストラリア ケアンズコンベンションセンター

【用務の概要】

今夏、8月5～12日の日程で豪州はケアンズへ出張し、国際獣疫学経済学会（International Symposium on Veterinary Epidemiology and Economics; ISVEE）に参加させていただいた。本学会は今回で11回を数え、その名のおり世界中の獣疫学者が集い、活発な意見交換がなされる場である。さらに「経済学」が示すように、畜産業の一部としての家畜衛生という視点を持った研究成果を発表する場でもある。

毎回学会のテーマは変わるが、今回は5日間の会期中、1) Aquatic Epidemiology、2) Disease Distribution & Determinants、3) Animal Health Delivery & Response、4) Tools & Training for Epidemiologists、5) Evaluation of Animal Disease、6) Global & Emerging Disease Issues、7) Food Safety & Zoonotic Issues の計7テーマ（実際はテーマごとにさらに細分化されていた）に沿った発表が行われた。演題数は、本学会の開催が3年に一度、また獣疫学・経済学を前面に打ち出した学会が少ないこともあってか、口頭発表は計500席、ポスター発表も300題を超えたものとなっていた。

私は本学会には初めての参加であったが、「Bovine Paratuberculosis in Japan: Trend of Recent Incidence」という演題で日本のヨーネ病の発生状況の取りまとめを紹介させていただいた。その他、動衛研からは筒井俊之上席研究員、山根逸郎主任研究員（演題：National Survey of Ixodid Tick Species on Grazing Cattle in Japan）、西口明子主任研究員（演題：Outbreaks and Controls of Avian Influenza Caused by H5N1 Subtype of Highly Pathogenic Virus in 2004 and H5N2 Subtype of Low Pathogenic Virus in 2005 in Japan）、山本健久研究員（演題：A Quantitative Assessment of the Risk of Exposure to Bovine Spongiform Encephalopathy via Meat-and-Bone Meal in Japan）が参加した。

【所感】

参加者それぞれが発表や議論を通して各国の研究者と交流を深めることができた。自身のことを書かせていただくと、私の発表に興味を示してくれたヨーネ病防疫の研究者と知り合いになれたことは、今後の研究遂行上きわめて有意義な出来事であった。実際、この出会いがきっかけとなり、酪農先進各国が参加するヨーネ病防疫に関する会議（於・中国上海、平成18年10月）において、アジアで唯一発表の場が与えられた。こういった積み重ねが自身の研究成果の質の向上につながるよう、今後も日々の業務に取り組んでいきたいと思っている。

また、本学会を通して世界の獣疫学に望まれる最新の研究アプローチ・手法等に直に触れられたことの意義は大きい。まだまだ遠い世界にも感じられたものの、良い刺激になった。それと同時に動衛研所員である以上、国内のローカルな問題にも取り組む姿勢も明白に必要である。そのバランス感覚を適度に保つことが求められていることを再確認した出張でもあった。

なお、次回のISVEE XIIは2009年、南アフリカ共和国はダーバンで開催されることとなっている。興味のある方は今回の詳細も含め、<http://www.isveexi.org>を参照していただきたい。



ISVEE XIのロゴ：2005年に急逝した世界的に著名なChris Baldock博士の子息、Christianによる。三角形は本学会の開催地の州であるQueenslandを示す。各辺はカーブによってプーマランを象徴しており、次回XIIへの参加を呼びかけ、三角形の頂点の丸みは疫学の持続的な発展を祈念している。

三角形の内部はまた、Epidemiologic Triad (host, agent, environment) を暗示している。